第42回まちづくり月間 2024

すいまち研　伊良波朝義理事長インタビュー interview

地域コミュニティ活性化や文化啓発に努める

伊良波 朝義　理事長

那覇市首里に拠点を置く「NPO法人首里まちづくり研究会（すいまち研）」は、2005年に創設され、地域のコミュニティ活性化や文化の啓発、地域経済と文化発展の推進を目的としてハード・ソフトの両面から首里地域のまちづくりをリードしてきた。発足以来さまざまな事業や調査研究を重ねる中で、オーバーツーリズムや道路渋滞などの課題に直面。その後、19年に首里城火災が発生。県では再建に向けた工事を進める中で21年度に「新・首里杜構想」と、その具体的な施策を取りまとめた「首里杜地区整備基本計画」を策定した。22年度には行政や地域、事業者、学術機関などで構成する「首里杜まちづくり推進協議会」が設立され、すいまち研をはじめとする6団体で結成した「首里杜地区まちづくり団体連絡協議会（首里杜会議）」も地域の立場から参画している。協議会での取り組み内容を、すいまち研の伊良波朝義理事長に聞いた。

―すいまち研について

すいまち研は、那覇市首里地域のコミュニティ活性化や首里文化の啓発、地域経済と文化発展の推進を目的として設立されたNPO法人で、2005年に創設され、首里地域のまちづくりに携わってきました。

創設したきっかけは、1999年から県が実施した「龍潭通り拡幅事業」です。事業実施には、那覇市と（公社）沖縄県建築士会首里支部が景観政策などについて議論を交わしていたという経緯がありました。道路拡幅で道路沿いの建物も大きく様変わりするということで、建築士会も専門家として首里地域のまちづくりに関わる必要があるのではないかということで活動を始めました。

活動を進める中で、メンバーに地元の人がいないことで、なかなか地域に浸透していけないという課題がありました。ちょうどそのころ、龍潭通り沿いで観光ボランティアをしている地元出身者の団体があり、お互い首里の将来についての意見が一致。ハード・ソフトの両面からまちづくりをしていこうということで2005年に建築士会首里支部と観光ボランティア団体で正式に「首里まちづくり研究会（すいまち研）」が発足しました。

―活動内容は

すいまち研を発足して最初に取り組んだのが「首里城お水取り行事」です。首里城お水取りは、琉球王朝時代に行われた儀式で、年末にやんばるの聖地である安須森の辺戸大川から汲んだ若水と恵方の水を合わせて王府に献上したというもの。国頭村辺戸地区との共同事業として地元住民を対象にバスツアーを行い文化啓発に努めました。

次に実施したのが那覇市の補助事業で、首里のニシカタ地区（大中、当蔵、桃原、山川）や金城町エリアに遊覧説明版30基を設置しました。県や那覇市が文化財指定している施設以外にも、首里地域にはたくさんの文化財があります。首里を訪れたさまざまな方に周遊してもらって首里のまちを知っていただけるよう、多言語表記（日本語、英語、中国語、韓国語）の説明版を設置したほか、電動アシスト自転車レンタルによるポタリング事業なども実施しました。

そして現在も継続している「首里ミツバチ花いっぱいプロジェクト」では、養蜂を通じ、色とりどりの花の咲く首里まちづくりを目指しています。「首里緑化まちづくりコンテスト」では、沿道から見える緑化の事例に対し功績を称え、管理している個人や団体を表彰しています。

―2019年の首里城正殿などの火災を受けて

すいまち研の活動を通して首里地域のまちづくりに取り組んでいた最中、2019年に首里城正殿をはじめとする9施設で火災が発生しました。本当に驚きました。実は私も書院・鎖之間の設計に携わったんです。

首里城周辺には、以前からオーバーツーリズムや道路渋滞などの問題がありました。原因は、首里城公園内の首里杜館にある地下駐車場です。首里城といえば、大型観光バスやレンタカーで直接アクセスし、首里城公園内を見て回った後はそのまま他のスポットへと移動してしまう「直行直帰型」の観光客が圧倒的多数でした。それで何が起きるか。普段、車が入ってこないような狭い路地まで、抜け道としてレンタカーが入ってきて、子どもたちが危ない目に遭っていました。渋滞だけではなく騒音や排気ガスにも悩んでいました。これを改善しようと駐車場を管理・運営する県に対して首里杜地区の郊外へ駐車場を整備し、首里杜館駐車場の閉鎖をお願いしてきましたが、なかなか前には進まなかった。ようやく財団や地域団体と那覇市で議論する場が設けられた矢先に火災が起きてしまいました。そして、奇しくも火災後から渋滞が解消されて「静かな首里」が帰ってきました。悲しい出来事ではありましたが、最大の課題は解決されました。

その後、首里城正殿の復元が決まりました。私たちも復興は楽しみです。ですが一方で「また同じ首里城（の仕組み）が戻ってきては困る」という課題が残っているというのが私たちの意見で、首里地域にある①古都首里のまちづくり期成会②首里振興会③御茶屋御殿復元期成会④城西小学校区まちづくり協議会⑤首里三ヶ城南校区まちづくり協議会⑥NPO法人首里まちづくり研究会で「首里杜地区まちづくり団体連絡協議会（首里杜会議）」を結成し、県や那覇市に提言書を手交。その後、県が策定する新・首里杜構想検討部会、首里杜地区整備基本計画検討委員会を経て、22年度に行政や地域、事業者、学術機関などで設立された「首里杜まちづくり推進協議会」に参画しています。

―「首里杜まちづくり推進協議会」の活動について

県では、2019年の首里城火災を受け、首里城の復元だけでなく、首里城を象徴する琉球・沖縄の歴史や文化の復興を目指すために「新・首里杜構想」を策定しました。これは、1984年に県が策定した「首里杜構想」を見直したものです。21年3月に発表された「首里城復興基本計画」に位置付けられており、首里城公園周辺の城下町（首里杜地区）の歴史的まちづくりの推進を目的としています。そして、22年4月に「新・首里杜構想」における具体的な施策などを取りまとめた「首里杜地区整備基本計画」が策定されました。計画期間は10年間で、22年度から正殿復元予定の26年度までを前期5年、それ以降を後期としています。基本計画には、私たち「首里杜会議」がまとめた提言もしっかりと反映され、県と地域が一緒に首里杜地区を盛り上げようという機運が生まれています。そして、計画の実現に向け、22年9月に行政や地域、事業者、学術機関などで構成する「首里杜まちづくり推進協議会」が設立され、年間を通したまちづくりの活動を実施しています。

協議会では、①古都首里を感じられる空間の創出②歴史文化資源等の保全・整備・活用③暮らしと観光が両立した住みやすく魅力的なまちづくりを基本方針として、県が実施する「県道49・50号線無電柱化推進事業」や「中城御殿跡地整備」、「松崎馬場など龍潭周辺整備」、「首里杜館駐車場の大型バス予約制による平準化」、那覇市が実施する「首里大中町細街路整備事業」や「住民による修景整備（赤瓦、石垣、緑化等）への助成制度」―などさまざまな事業がロードマップに盛り込まれています。

首里杜まちづくり推進協議会に参画

―地域の取り組みについて

協議会の中で、23年度から「景観・歴史文化部会」と「暮らし・生活環境部会」が設置され、県や市、地域などでテーマ活動を中心とした取り組みを実施しています。その中で昨年度は、①ニシカタ地区まちなみづくり検討②地域資源案内検討③地区交通の検討④龍潭周辺の全体利用のあり方検討―などテーマごとにワークショップや勉強会、アンケート調査を実施しました。ニシカタ地区については、①景観上の課題の抽出②現地調査③先行指定地の事例の共有―などの活動を行い、地域と行政とで価値観や課題を共有することができました。また、地区交通の検討については、①県で実施中の交通関連調査検討内容の共有②バス予約システムの効果や課題の注視③点在する地域資源等の案内や誘導を踏まえた、生活エリアと観光エリアのゾーニングや望ましい周遊の在り方―などについて検討しました。その結果、交通混雑対策や安全安心な交通環境の実現に向け、ゾーン30プラスの導入提案などがあり、道路の安全性を担保しつつレンタカーの動線を誘導していくようなな取り組みについて参加者間で議論ができました。

交通と周遊はセットでなければなりません。今年度は引き続き、「地区交通の検討」と「地域資源案内検討」のワークショップや勉強会を実施する予定です。協議会に関わっている事業課に引き続き提言していけたらと考えています。

―今後の抱負

首里のまちは約600年の年月を重ねてつくられてきました。歴史が薫る風格のあるまちを次の世代につないでいくのが私たちの役割だと考えています。そのためにも、首里をもっと盛り上げていかなければいけません。

今年3月に首里城公園で行われた「春の御城まつり」で、首里の龍潭通り周辺の事業者たちが「首里の朝市」というイベントを開催しました。企画したのは、首里城下町に店を構える商店会の有志たち。出店したのは、コーヒーショップやベーカリー、沖縄そば店やスイーツ店のほか、アクセサリーや工芸品を扱う店も参加し、大盛況だったとのこと。その後、同商店会の代表の方から、一緒に首里のまちづくりをやっていきたいとの嬉しい声掛けがあり、首里地域に対する思いも聞かせてもらい意見が一致。一緒に活動を行う予定です。今後も首里のまちをいろいろな方に知ってもらえるような取り組みを心掛けていきたいと考えています。

首里杜地区の歴史まちづくりを推進